

日本文芸学会第180回全国大会次第

第一日 二〇二四年七月六日(土) 午後二時開始(大会受付 午後二時三〇分)

会場：セント・ヨゼフホール二階 三〇〇-B

開会の辞(午後二時～二時一〇分)

ノートルダム清心女子大学 長原しのぶ

研究発表(午後二時一〇時～二時五〇分)

「草いきれ」論争の問題圏——〈私小説〉とモデル小説の交点——

二松学舎大学非常勤講師 伊豆原潤星

特集「文芸研究の現在とこれから」第一部

講演(午後二時一〇分～五時一〇分)

外村繁年謹稿と全集未収録作品集の刊行

安田女子大学 外村彰一

※開会に先立ち、理事会を開催します。

理事会(午後〇時三〇分～一時三〇分、会場：セント・ヨゼフホール二階 二〇〇-A)

懇親会(午後五時三〇分)

カリタス・ホール一階 カリタス食堂

第二日 二〇二四年七月七日(日) 午前二〇時開始(大会受付 午前九時三〇分)

会場：セント・ヨゼフホール二階 三〇〇-B

研究発表(午前二〇時～午後〇時一〇分)

「罪を犯した私」と「自責する私」の対決——レヴィナスの他者論で夏目漱石の『夢十夜・第三夜』を読む——

西安外事学院 趙 暁妮

内田百閒「サラサーテの盤」における見えにくい死者

日本体育大学 今野 哲

文学における夢の復権——一九七〇年前後の『群像』所収のテキストを中心として

二松学舎大学大学院 杉浦楓太

総会(午後一時二〇分～午後二時)

特集「文芸研究の現在とこれから」第二部

講演(午後二時～四時)

西鶴と狸——創作側と受容側の関係をめぐって——

関西学院大学 森田雅也

閉会の辞(午後四時)

追手門学院大学 西尾宣明

第三日 二〇二四年七月八日(月)

岡山文学踏査(事務局で資料を用意しますので、各自でご踏査ください)

日本文芸学会第160回全国大会 講演・研究発表要旨

《七月六日》

研究発表

「草いきれ」論争の問題圏——〈私小説〉とモデル小説の交点——

一松学舎大学非常勤講師 伊豆原潤星

一九五六年、徳永直と壺井栄の間に論争が巻き起こった。この「草いきれ」論争として知られる論争は、徳永が『新潮』一九五六年七月〜八月号に短編小説「草いきれ」を掲載したことに始まる。「草いきれ」は、妻に先立たれた小説家が、敗戦直後に別の小説家の妹と再婚するも約二ヶ月で破局を迎えるまでを描いた小説で、徳永が壺井の妹・岩井シンと再婚・離婚した経験が題材となっている。壺井は、一九四七年に『新日本文学』に「妻の座」と題した徳永と妹の離婚を妻の側から書いた短編小説を発表しているが、同じ題材を夫の側から書いたのが「草いきれ」なのである。登場人物の名前は「妻の座」を踏襲しており、広告も「妻の座」のモデルが初めて沈黙を破る問題の真相」（『週刊新潮』、一九五六年七月三〇日）、「妻の座」以来の非難に対して切々訴える夫の立場」（『週刊新潮』、一九五六年八月二〇日）というものだった。このような枠組みが与えられている以上、読者は、「草いきれ」を「妻の座」に対する反論として読むことになる。必然的に「妻の座」の作者である壺井との間に書かれていることは事実かどうかという論争を生み、他の多くの文学者の関心を集めることとなった。

確認しておきたいのは、「草いきれ」は脈絡もなく約一〇年前のことを小説にしたわけではないという点である。壺井は、「妻の座」以降も、徳永のことを書き続けた。一九五三年には徳永の相次ぐ離婚をモデルとした長編小説「岸うつ波」を『婦人公論』に連載。さらに、一九五六年六月の『文芸』誌上においても徳永について言及している。このような経緯を経て書かれた「草いきれ」は、「妻の座」一作だけに対する応答ではなく、「岸うつ波」を含めた壺井による徳永への言及すべてに対する応答なのである。

ただし、本発表では、徳永と壺井が小説に書いたことが事実か虚構かといったことは論の対象としない。どちらが正しいかといったことは平行線をたどった双方の言説からは明らかにできない問題だからだ。武井昭夫は、「草いきれ」を巡る論争全体を評して「戦後十年の民主主義文学の暗さ、愚かさ、不毛性の側面の重要な一因が、顔をのぞかせているのではないか」と喝破している（武井昭夫『「草いきれ」と『妻の座』の同位性』（『新日本文学』、一九五七年一月）。「草いきれ」の問題を徳永と壺井の個人的問題に収斂してしまうことは、背景にある様々な問題を見落とすことでもある。本発表では「草いきれ」論争を表象と受容の両面から捉え直し、民主主義文学の状況を補助線として引きながら、アジア・太平洋戦争後の文学場における〈私小説〉と〈モデル小説〉の交点を明らかにすることを試みたい。

外村繁年譜稿と全集未収録作品集の刊行

安田女子大学 外村 彰

今回の講演では、継続して今日まで調査を行ってきた作家・外村繁の年譜の(一旦の)公表を行い、あわせて外村の書誌研究から見出された全集未収録作品の編集・刊行の試みにつき話すつもりでいる。

滋賀県生まれの私小説作家・外村繁(一九〇二〜一九六二)の書誌を作り始めたのは平成八(一九九六)年。その成果『外村繁書誌稿』(五個荘町教育委員会、平十・七)の刊行後、調査・収集し得た著述は「外村繁書誌稿・補遺(一)」「(『論究日本文学』七五号、平十三・十二)、「外村繁書誌稿」補遺―年表追加・参考文献篇―」(『文献探索2008』金沢文圃閣、平二十一・六)、「外村繁書誌稿」追補抄」(『日本近現代文芸研究』二号、全元・十)にまとめ、書誌作成の経緯は『文献探索2001』(文献探索研究会、平十四・七)に『外村繁書誌稿』について」と題し執筆をしたことがある。

外村繁には、近江商人ものと称される「鵜の物語」(『麒麟』昭八・九)、第一回芥川賞候補にもなった長篇『草笈』(砂子屋書房、昭十三・十二)、晩年に自己の性欲史を綴った『濛標』(『群像』昭三十五・七)、夫婦での癌との闘病を記した『落日の光景』(『新潮』昭三十五・八)などの代表作がある。近江商人であった実家の営為、そして愛と性の問題に誠意をもって向き合い、かねて親鸞の思想に共鳴して生きた篤実な作家であった。

同県出身である発表者は、地縁と同姓の縁からこの小説家に親しみを抱き、現在までに多くの資料を集めてきた。たとえば『外村繁書誌稿』に記載した外村繁の書目は単著¹⁾、単行本一部所収²⁾、全集³⁾(個人全集全六巻を含む)にわたった。同書で調査し得た著述は834項目を数え、参考文献は665項目が見出された。ちなみに、講談社版の外村繁全集では小説⁴⁾、ほかに随想評議類⁵⁾、計73の文献が収録されていた。

それら初出誌紙、初刊・再刊本といった通時的な書誌を併せた年譜を作成してみたわけだが、これら多数の全集未収録の文章類を、後世に遺す「紙碑」にできないか――かかる思いから、かねて『外村繁文学叢書』全八巻の出版を企図していた。ただ出版事情は苦しく、その実現には難しいものがあった。とはいえ、前年度に申請を試みた結果、現在の勤務校からの補助が見込めることになり、国立国会図書館に資料のない『友愛』誌をめぐる長篇連載小説「淡雪」「故郷は」の刊行がまず期される運びとなった。こうした経緯についても報告が出来ればと思考している次第である。

《七月七日》

研究発表

「罪を犯した私」と「自責する私」の対決——レヴィナスの他者論で夏目漱石の『夢十夜・第三夜』を読む——

西安外事学院 趙曉妮

「第三夜」は親子の謎めく会話の進行により、何かはつきりさせることのできない不安感が徐々に引き出されてくる。年不明の父親は「自分」の「六つになる子供」を背に負って、夜道を歩いているが、その子がいつの間にか「盲目」になっていることさえ知らなかった。それに気が付いた父親は驚いて子供に「いつになった」と尋ねると、「何、昔からさ」と「大人」的な言葉つきで、しかも「対等」な態度で答えられた。すると、父親が子供の「盲目」に気づいた瞬間から、不思議なことは次から次へと発生し、親子の「対決」も始まった。

まず、子供は父親のことが全知しているのだ。父親の背中に背負われている子供は「盲目」なのに、父親の歩いている夜道のことのはつきりとわかっている。しかも、父親の考えていることをすぐ見通してしまうのだ。一方、父親の子供に対する反応を見よう。まるで「大人」のように自分と「対等」に話す気味の悪い我が子に、父親が恐怖を感じると、すぐどこかに捨てようと考えた。だが、何かはつきりすることのできない不安の中で子供の言いなりになり、反抗せずに子供に導かれていく。結局、子供にお前が殺人犯だと指摘された瞬間に、過去を思い出したように自分の「犯罪」を忽然として「自覚」した。

この親子の「対決」の裏に何かはつきりと思えないもの、あるいは言葉にならないものが隠されている。それを明らかにするために次のような疑問点について整理しておいた。その一、父親が背負っている子供の正体をはつきりとさせる。なぜその子は子供ながら父親の「過去、現在、未来」については全知することができたのか。その二、父親が「我子」に対する態度をどう読むのかを明らかにする。なぜ「我子」と言いながら捨てようとする気になったのか。また、なぜ子供の「有罪」という指摘に忽然として認めたのか。その三、この作品の意義を全体としてどうおさえるのか。親子の「対決」は一体どういうことなのか。以上の疑問を踏まえ、この作品を読み返し、レヴィナスの他者論から「第三夜」のもつ意味について考えてみたい。

この親子の「対決」をレヴィナスの「他者論」で分析すると、次のようなことになる。盲目ながら父親のことを全知している子供と、未知なる恐怖に逃げようとするが逃がせず急に自分が殺人犯だと自覚した父親は、実は一人のことである。その一人の「自分」が親子の「対決」という形で現れている。一人は「罪を犯した自分」であり、もう一人は「自責する自分」である。父親はその「罪を犯した自分」であり、殺人者でもある。一方、子供は「自責する自分」であり、盲目の小僧でもある。「第三夜」は「自責する自分」（子供）は「罪を犯した自分」（父親）におのれの「有責性」を自覚・喚起させるために働き、自分の善性を基礎づけるために現れるという他者論のメカニズムを作品化されたものである。

例えば、太宰治「走れメロス」の場合、暴君ディオニスに殺された死者たちは、作品解釈の基幹部分には浮上させにくい。あるいは、中島敦「山月記」において、虎の李徴に喰い殺された死者たちも同様である。そのような、見えにくい死者という観点から、内田百閒の短編小説「サラサーテの盤」(『新潮』一九四八・一一)について、些かの新見を加えたい。

「サラサーテの盤」は、「二」〜「十二」の短章によって構成された作品である。作中人物「私」の家を、亡友中砂の後妻おふさが幾度か訪ねて来ては、中砂の遺品の書籍・レコード等の返却を求める。おふさは、「私」と中砂が、学窓を出て間もない頃、東北の町へ小旅行をした際に出会った芸妓である。中砂は別の女性と結婚し、一子を設けるが、西班牙風邪で妻を喪う。おふさは、遺子の乳母として中砂の許に来て、新たな妻におさまるが、二人の夫婦関係は円満さに欠けたものであり、数年後に中砂は病没した。その後、おふさは「私」を訪ね、遺品の返却を求めるようになる。ある日は、中砂の遺きみ子の寝言の意味を「私」の妻に尋ねたい、とも言う。作品末尾、レコードに混入している話し声を聞いたおふさは、取り乱して泣き出す。以上が、作中の出来事の簡略な整理である。

「サラサーテの盤」については、個別作品論にもある程度の蓄積がある。研究上の関心を引いている百閒作品の一つといえるだろう。先行研究では、おおむね百閒の幻想性・怪異性を主軸とした作品系列の一つに位置づけられている。「私」を訪ねる際のおふさの挙措、発言内容、そして作品末尾のレコードの音声とそれに対するおふさの反応等に照らして、(さらには怪異を感受する「私」のあり方とが相まって)、如上の位置づけは妥当なものであるとは言える。

ただし、おふさの亡児に着目すると、作品の手触りに若干異なった感じが生じるのではなからうか。おふさは、中砂との結婚前に、嬰兒を喪っている。この点について、作品の記述は僅少であり、先行研究でも、あまり重視されていない。作中における中砂の死および中砂の妻の死は、作品の基幹部分に明示された死である。一方、おふさの亡児は見えにくい死者である。この亡児が、おふさと中砂の調和を欠いた夫婦関係や中砂没後のおふさの奇矯な言動の一つの因由となっていはいはしまいか。そのように捉えると、「サラサーテの盤」の怪異・幻想の背景には、おふさの現実的な愛別離苦がありそうだ。

そして、如上のおふさの状況は、流離の人「チゴイナー」(『ロマ』)としての彼女のあり方とも交響する。吉川望(内田百閒「サラサーテの盤」論)は、「チゴイナーヴィゼン」の曲調が、本作の世界と重なり合う点を指摘している。本発表でもそれを継承し、「チゴイナーヴィゼン」の憂愁・悲愁を、おふさの心象を音響化したものと考ええる。

以上を主論点として、「サラサーテの盤」に関する読解の新規可能性を提示したい。

本稿では、一九七〇年前後の『群像』所収のテキストに現れた、夢に関する言説を分析する。近現代文学の研究史を通して、夢は精神分析学を中心として研究対象となってきた。しかし、文学において夢が登場する頻度は高いにもかかわらず、夢に関する言説の変化を捉えようとするものは少ない。同時代の夢に関する認識を明らかにすることは、同時代の文学の分析に少なからず寄与するものと考えられる。本稿では、一九七〇年前後の夢の言説を対象とすることで、とくに夢と文学とのかわりに着目して、同時代の文学における夢の認識を捉えたい。その際、対象の選定が恣意的になることをおそれ、代表的な文芸誌のひとつである『群像』所収のテキストを主としてあつかうこととした。以下が、その見取り図である。

少なくとも『群像』において、一九六〇年代中ごろまでの文学における夢は、同時代評において、概ね冷やかな眼差しが向けられてきた。つまり、文学において夢は排斥される傾向にあったのである。しかし、一九七〇年前後には、文学における夢の意義が強調されるようになる。このような夢と文学をめぐる言説空間は、いかに形成されていったのであろうか。本発表は、この疑問をめぐって展開する。

一例をあげれば、『群像』における状況の変化を捉えるうえで、後に『壊れものとしての人間』（講談社、一九七〇・二）として刊行される、大江健三郎の連載「活字のむこうの暗闇」（一九六九・七―二）は見逃ごせない。大江の議論では、想像力を媒体として、夢と文学とを結びつける。この背景には、小説と現実とを対立するものとして捉える見解に反論する際、文学同様に現実の対立概念として見なされてきた夢の擁護が要請されたことが想定しうる。大江の評論において、夢・文学・狂気とは想像力によって架橋されている。いったんこうしたアナロジーが正当性を帯びれば、夢の擁護は文学の擁護につながり、逆に、夢を批判することが文学そのものの批判につながる可能性を孕む。

大江の指摘は『群像』において新しいものであったが、外部においては、すでに埴谷雄高が評論集『垂鉛と弾機』（未来社、一九六二・四）にまとまるような議論をなしていた。しかし、こうした言説が『群像』において広く参照されるようになるのは、七〇年前後である。大江の評論を始めとして、本発表では、川村二郎の連載「チヤンドスの城…文学と夢についての試論」（一九七五・一〇）～一九七六・九を含む、文学と夢とを接続する種々の言説を概観する。分析によって、場や時代の状況における各々の論者の立ち位置が浮き彫りになることである。分析の終わりに、錯覚が夢と似た効果をもたらしている黒井千次の小説「石の遊び」（一九七五・一）についても言及し、論の今後の可能性を示したい。

講演(特集)「文芸研究の現在とこれから」第二部

西鶴と狸——創作側と受容側の関係をめぐって——

関西学院大学 森田雅也